



目次

追悼	石井先輩を偲ぶ……………石原 脩
	石井さん有難うございました…佐藤 恭
	石井さんとの山行の思い出…蛭川 隆夫
	5 3 2

アンナプルナー一周トレッキング……………佐藤 久尚
8

私の現役時代……………俵 昭
13
ニュージールランド山岳会の 名誉会員になる……………中村 保
16

90周年事業準備状況……………
17

三月会通信……………
19
編集後記……………
28

表紙写真「カラパニ村からのアンナプルナー峰（左端のピーク）
撮影・岡田健志

発行日 2012年3月10日

発行者 針葉樹会
(会長 竹中彰)

印刷所 ヤマノ印刷㈱

針葉樹会報 第 123 号

編集人 小島 和人
〒241-0817
横浜市旭区今宿 2-60-1
会報幹事/小島和人、倉知 敬
井草長雄、川名真理

追悼——石井左右平氏

石井先輩を偲ぶ

石原 脩（昭30年卒）

石井さんとの最後の山行は、中央線沿線の岩殿山だった。山頂での昼食後、石井さんは出発を前にした先頭の私を抜いて歩きだした。そして、「下りは先に歩かないとね」と、笑った。その笑顔が昨日のことのように思い出される。哀悼の念、切なるものがある。

開戦四ヶ月後の昭和17年4月に入学、入部された先輩は、山へ行くこと自体が憚られた戦中を登り切り、戦後の昭和23年3月の卒業まで、部の伝統を支えられた。

石井さんと特に中村（S）さんからの話だが、「戦後初登攀」という言葉を部室で聴かされた。最早、推測の域を出ないのだが、終戦の翌年、昭和21年7月、明神峠が通れないからと梓川沿いに涸沢に至り、さらに奥又に入って4峯の明大ルートに登った等の記録は

「戦後初登攀」そのものだと思う。

自分の話になるが、おなじ7月に私は父に連れられて鳳凰山に登っていた。燕頭山頂の熊笹は道を閉ざし、鳳凰小屋内のノートには、2週間まえに二人の登山者がドンドコ沢から来たとき書き残されていた。「尾根筋からの初登攀」か否かは調べようもなかったが、沢の丸木橋は流され、何日山中にあつても人と逢うこともない自然がそこにあつた。

昭和26年、石井さんが去って三年後に私は入部した。先輩へのお使いも多く、そのひとつが東京駅前太平洋貿易での森脇・石井・伊藤、三先輩方への次の山行計画の報告だった。当時では貴重品のカンヅメが頂戴出来たのだ。

カンヅメの話は、石井さんの針葉樹第11号の文中にも見受けられる。19年冬季の奥又入りのための食料としてリュック一杯のカンヅメを堀岡大先輩から頂き、勇気を貰って現地入りしたと記されている。

食糧難時代の良い伝統と言えばそれまでだが、米以外は肉無しカレーと味噌汁のみの食事の中で、カンヅメは宝物だった。

その後、石井さんの2度にわたる長期米国



滞在もあつて、30年の歳月が経過するが、急に海外勤務が決まった横山さんに代わって昭和61年から石井さんが会長になられた。

その6年間の回想が会報77号に寄せられていて、63年剣沢源次郎尾根取付きでの細野君の遭難以来、会長にとり困難な時期が続いたことが記されている。

この後、数年間続いた山岳部廃部問題については、当誌面で語ることは適切ではない。しかし「昭和40年代からの一橋山岳部の遭難多発」「他校で生じた校外活動による事故責任の学校への転嫁」「山の遭難に対する社会通念の変化―大日岳雪庇崩落事故死に対する日本山岳会への訴追など」の要素が一度に重なったものだ。石井さんの責任ではない。



2001年9月、涸沢にて。
左から 春日井、中村（正）、石井、佐薙、望月（敏）

しかし、この経験は今でも生かされなければ、と思う。
学校内に部長はいなくなったが、遭難対策は万全にして、学校にも社会に対しても迷惑を掛けないようにしたい。遭難対策基金を減らすことはしたくない。

石井さんは米国での営業活動のために、大リーグ情報に通暁していたが、それ以上にゴルフへの思いと腕前は確かのようなだった。ある時「山ではないが、針葉樹会でゴルフをそれなりにヤルやつはいるか？」と聞かれ「40歳の頃ならば」と自分の好スコアを答えたが、「フン」とのことだったので、私は戦わずに敗れている。

石井さんの米国での山は、山好きの娘さんが在住するシアトル近郊のカスケード山群だ。そして平成に入って10年程、私も兼務の会社のお陰でワシントン湖対岸のコンドミニアムを拠点にしてシアトルの四季を楽しんだ。

シアトルの山は、千六百メートルからが森林限界で、二千メートルから上は氷河になる。北米材輸出時代の林道は広く奥山まで続き、登山道の入り口には駐車スペースと登山カートの受付台があるが、その先に指導標の類は一切無い。

石井さんの現役時代のように、数日間他の登山者に逢わないような山は、最早日本にはない。石井さんの心霊はレーニエ山が見える「シアトルの東」あたりと私は信じている。
(合掌)

石井さん有難うございました

佐薙 恭(昭31年卒)

12月の三月会も終わり近く、出席者の一人から石井さんが亡くなられたというご親族からの葉書が紹介された。久しぶりの神保町での二次会を終えて深夜に帰宅すると自宅にもその葉書は届いていた。あゝ、とうとうその日がきてしまったか。石井さんと過ごした日々思いを巡らしていると夜が明ける頃になっていた。

私の知る石井左右平さんのプロフィール。
1925年生まれ、生家は銀座のど真ん中。今も銀座に存続する泰明小学校から府立五中(今の小石川高校)を経て昭和17年東京商大

予科に入学。石井さんのあの身についたダンディズムは生まれと育ちが天下の銀座だったからに違いない。

山岳部同期は山崎さん、中村（讚治）さん、関さん他。その頃の山岳部活動を石井さん自らが書かれたものとしては「針葉樹11号 十号以後の歩み 昭和18年—21年」、「針葉樹会報 110号 わが現役時代 中村讚治のこと」がある。昭和23年に卒業後は食品の輸出入を主に取り扱う商社に勤務され、米国駐在は複数回。好きだったお酒は木曾の「七笑」と「ニッカゴールド」。

私が山岳部現役時代の石井さんは合宿の時にコンビーフなどの貴重な缶詰を差し入れて下さる有難い先輩だった。我々が自分たちの予算で調達できる肉といえはその頃は安価だった鯨のベーコンが主なもので、そういう時代だった。

私が卒業して数年後、アメリカ・ロスアンジェルスに出張した時、石井さんは現地に駐在して日本食品の拡販に努めておられた。たまたま私の勤務する会社の駐在員が中学、大学とも石井さんの後輩でお付き合いがあった関係で、私のゴルフはビギナーだったが頭数揃えてゴルフにご一緒する機会があった。美しいスイング、スコアー、コースでのたたず

まい、私の目には石井さんはプロゴルファーのように映った。

さらに数年たって1960年代、私は仕事上、テキサス州の小都市に家族共々住むことになった。早速石井さんから日本食の差し入れがあり、その後私たちを含む会社の同僚数家族が継続的に日本食の材料を購入できるルートを作って下さった。

そういう風に、石井さんのことは私が学生時代から存じ上げてはいたし、卒業後もアメリカでお世話になっていたのだが、山歩きを通じてのお付き合いが始まったのは石井さんが70代に入られる頃、私が定年直前の2回目のアメリカ勤務から帰り、自由の身となった頃からだった。

針葉樹会の会合の場で「どこかにご一緒させて下さい」と申し上げると、「ミルフォードトラックをもう一度歩き直したいんだ」とのことだった。私も行きたいと思っていた場所でもあり、そのプランは2001年2月に実行された。同行者は石井さんの予科以来の盟友山崎さんに加え、高崎（治）、上原の両兄だった（会報94号）。昼間の行動もさることながら、毎晩のニュージージーランドのワインを酌み交わしての酒盛りが忘れられない。

その年の夏、オーション会は涸沢から奥穂

の登頂を計画、前後の会員にも声をかけた。

登頂をすませ涸沢から横尾への下り、オーションには下りが全く弱い面々がおり、遅々として進まない。石井さんと中樹会の海老沢さんに先に行っていただくことにした。お二人は飛ぶように下って行かれた（会報95号）。

記録を書いた松尾（寛）兄によればその時の石井さんは「山岳ゲリラの親分的風貌、日焼けした額に巻いたバンダナがよく似合う。我等若者を凌ぐ健脚で常にパーティをリードする。推定年令60歳」。

その翌年、オーション結成50年、アダージオをベースに木曾駒、宝剣に出かけた。宝剣は一般ルートと言えども岩場がらみでなかなか手強い。山頂からの下山路を眺めながらためらっていると、石井さんが先頭に立ち軽々と下って行かれた（会報99号）。その後も鳥海山、燕岳、平ヶ岳、御岳山、西天狗岳、権現岳、金峰山など忘れられない山行がいくつも続く。石井さんにお供しての私の山行はミルフォード以降20回を越えていた。

ここであまり知られていない石井さんのエピソードを一つ二つ。

その一。石井さんはあれほど我々と飲む機会を楽しみにしておられたのに、ご家庭では自由に毎晩お酒をというわけにはいかなかった

たらしい。きびしい休肝日のルールが（確か週に2日くらい）課せられていたのだが、我々と一緒される時はそのルールが免除されるらしいのだ。会社では社長か会長が一番偉かった筈の石井さんにも、ご家庭にはどうやら上司のような方が居られたらしい。

その二。或る朝の電話。「昨日の五反田の飲み屋の名前を教えてください。財布を忘れてきた。金は大したことはないのだが、免許証が入っているんだ」。うろおぼえの飲み屋の名前をお教えしての後日談。飲み屋に財布はなかった。石井さんはすぐ免許証の再発行のため小金井へ。再発行の手続き中ご家庭からの呼び出しの構内放送。財布は違うズボンのポケットにあった。

お元気だった石井さんの体調が、あれ、少しおかしいなと感じたのは2008年3月の生藤山だった。石井さんが言い出され、前年に亡くなった三月会の開祖、山本健一郎兄の追悼会を奥多摩は数馬の宿で行うことになった。その宿に行く前の山行として私は石井さんを生藤山へお誘いした。下りの後半から石井さんの足取りが乱れてきた。最後の短いピッチではあったが私ははじめて石井さんのザックを取り上げて自分の背に担いだ。石井さんのお気持を察するとやりたくはなかった

胸痛む行為だった。

石井さんは翌日の笹尾根をあきらめ、高崎（治）兄の付き添いで帰宅された。高崎兄によれば石井さんは大分落ち込んでおられたという。思えば私にとってこれが石井さんとの最後の山行だった（会報112号）。会の記録ではその年の5月のアダージオの懇親山行に参加されているのだが、小生の都合が悪く不参加だったのでその時はお元気だったのかどうか。

山本兄が2002年2月に始めた今の三月会にも立ち上がりからずっと精勤だったのだが、いつごろからか顔を出されなくなった。それがいつからだだったのか、私の記憶はさだかでない。山崎さんの事故後にはお電話で数回お話をした。つらい気持をお持ちの様子がひしひしと伝わってきた。体調が良くなるればたら新装なった如水会館14Fでせめて昼のお酒でも、大勢で賑々しくと思っていたのがついに叶わなかった。

石井さん、長い間お世話になりました。楽しい機会を沢山作っていただき有難うございました。しばらくお会いできないのは残念です。しかし今頃はあちらで、少し先行された同期の山崎さんや待ちくたびれておられたであろう中村讚治さん、そして針葉樹会の多く

の先輩や後輩たちと車座になって楽しく杯を交わして居られる筈、その様子が目に浮かびます。私ほか、親しくしていただいたオーション会の仲間たちもぼつぼつ80代に入ります。そう遠くないうちにそちらに参ります。その時はまたよろしくお願いします。

石井さんとの山行の思い出

蛭川 隆夫（昭39年卒）

石井左右平さんを含む大先輩の山行に初めて加えてもらったのは、2003年12月、身延線沿線の篠井山と三石山だった（メンバーは石井・山崎・佐藤・春日井・蛭川）。そのときのことは、『針葉樹会報』第117号の「山崎さんの思い出」という追悼文でふれた。その中で「（山麓の宿で）入浴順序、食卓での座る位置、布団を敷く位置などすべてに最後まで末席とを心がけるといふ緊張感があった」と私は記したが、とりわけ緊張感を感じたのが長躯と大きな眼の石井さんだった。

その1年後の12月には、奥多摩の三頭山と

浅間尾根（石井・山崎・佐藤・山本・高橋・蛭川）。山崎さんのご希望で教馬に宿を取った。この山行は、石井さんと山崎さんの傘寿を祝うもので、佐藤さんと故・山本健一郎さんが世話人だった。宿での酒宴で石井さんから「君が紀行文を書いて会報に載せよ」と命ぜられ、私は駄文を第103号に寄稿した。

2005年の師走は、ふたたび身延線沿線の山となった。2年前と同じ十枚温泉に泊まり、浜石岳と十枚岳に登った（石井・山崎・佐藤・山本・有賀・本間・蛭川）。

こうして3年続いた石井さんなどの忘年山行だが、4年目の2006年は実施されなかった（何かの事情があったのだろうが、記憶がはっきりしない）。2007年の忘年山行は、竜坂峠から三国山&石割山（山崎・佐藤・竹中・本間・西牟田・蛭川）。直前までメンバーに入っていた石井さん不参加となった。これも理由は思い出せない。

忘年山行以外にも、沼津アルプス、大野山、岩殿山、矢倉岳などの懇親山行にも一緒に一緒した。懇親山行では、石井さんは山崎さんとともに常連メンバーだった。

大野山の反省会では、新松田駅前の焼肉屋に飛び込んだ。幹事が飲物の注文を聞いてまわると、石井さんは、山崎さんとちよつと言

葉を交わして「こっちは日本酒だ」と言った。こういう席ではビールで始めるのが普通だからその時は少々驚いたが、それから6年たった今、私はビールを飲むと炭酸で腹がふくれるので困っている。そして、ビールを抜かして最初から日本酒や焼酎でやるという、両長老のスタイルをときどき実践している（ここで思い出したが、昨年亡くなられた中川さんも同じ飲み方だった）。

岩殿山山行のあった2007年3月4日は、山本健一郎さんの初七日。下山後の大月駅の居酒屋「かあちゃん」で、故人への献杯役を指名された石井さんは、「献杯の前に山讃譜を歌って山本の冥福を祈ろう」と音頭を取られた。

個人山行で思い出すのは、2005年4月の本社ケ丸。石井さんは、足が攀って、さかんに「レッドキックホット」を塗りこんでいた。それで健康が話題になったのだと思うが、石井さんは「そういうえば君も身体障害者なんだろう」と私に言われた。ほぼ2年前に患った椎間板ヘルニアのことを聞かれたのだった。石井さんとは一対一で話をしたことがあまりなかったせいか、私はこの言葉をわざわざメモに書き残した。こちらからどういう言葉を返したかは、記録にも記憶にもない。

もう一つ忘れたいのは2007年4月の個人山行。峽南の秘湯に泊まり、山に登り（貫ヶ岳・高ドッキョウ）、富沢町名産の朝採りのタケノコをゲットするという趣向であった。メンバーは、北海道から遠征の小野さん、竹中さん、私の高校山岳部同期のK、それに石井さん、山崎さんという、異色の組み合わせであった。

石井さんは、お住まいの小平市から遠い本厚木駅での集合時間を自ら決めて申し出るなど、この計画に乗り気であった。また、二万五千の地形図の名称を電話で問い合わせられてきた（ガイドブックや昭文社で間に合わせていたので即答できず、大いに反省させられた）。残念ながら、直前になって山崎さんが不参加となった（平塚市立博物館地質部でのボランティア活動Ⅱ岩石切削作業との日程調整が難しくなった）。続いて石井さんからも「缺席」のFAX、そして電話。

FAXの一部を引用すると「矢張り（奥様を）ドクターに連れて行くなどのことが出て来るので甚だ残念ながら今回は不参加とさせて頂きます。此のところ山行がえらく減っているのて今后が一寸気になります。が今後何卒宜しく御願致します」とあり、「タケノコがいささか心のこりです」と結んでいる。この山行が実現していれば、両長老に親しくいろ



2004年1月、沼津アルプスにて。
左から 佐藤(久)、佐藤、石井、三井、川名、春日井、蛭川、山本(健)

いろいろなことをお聞きできる初めての機会となつたはずで、それが叶わなかったことは今でも残念に思っている。

このように奥様の健康問題と（これは想像だが）ご自身の体力・体調問題とで思うように山に行けなくなつた歯がゆさを感じておられた石井さんだが、1年後には山本さん追悼山行を計画せよと自ら指示された。それが2008年3月の奥多摩で、宿は傘寿祝賀山行

と同じ数馬にした。このときも、歩く方は初日から思わしくなく、二日目も登らずにバスで五日市駅に向かわれた。しかし、思い出の数馬の宿では追悼の話に花が咲いて盛り上がり、石井さんは十分満足されたと思う。

それから二か月後のアダージオ懇親山行。石井さんと山崎さんは、初日の茅ヶ岳を敬遠してアダージオに直行すると参加申込みであつたが、直前になり、石井さんから「やはりどこかに登りたいな」とのお電話があつた。この種の電話は本来なら佐藤さんにゆくものだが、このとき佐藤さんはよんどころない事情で不参加だつた。そうであればお二人のためのプランを考えるのが幹事の役目だというのに、そういう配慮に思い至らなかつた自分が情けなかつた。しかも、二日目は竹中さんとともに山本別荘で遺品整理をする約束を山本末亡人としていた。

困つたあげく、自分が行つたことがないが有賀・高橋・小野組の霧訪山はどうかと思ひ、いろいろ資料で調べた（この山を三月会に導入した三井さんにも相談した記憶がある）。その結果、急がずに歩調を整えて登れば大丈夫と判断できた。さつそくこの組のリーダー役の高橋さんの了解を取り付けた。同時に、札幌の小野さんに電話して、トップになつてうまく両長老をリードしてほしいとお願いし

た。小野さんが「ビスタリビスタリ」「ゆつくり」「ゆつたり」などと会報第113号に記したように、トップの的確な速度設定とペース配分で石井さんは何のトラブルもなくこの眺望の山を楽しむことができた。

しかし、その後の懇親山行には、高川山、丹沢・三の塔、高麗山など比較的負荷の小さい目的地を幹事一同で相談して取り上げたにもかかわらず、石井さんは顔をお出しにならなかつた。それで、霧訪山が石井さんの生涯最後の山となつた。それは、傘寿山行から3年半後だつた。自分は、その年齢までとても登れないだろう、いや傘寿まですらおぼつかない。それだけに、石井さんが山への強い思いを持続させたことに深い敬意と驚きを禁じえない。同時に、その思いを実践に移せなくなつてからの数年間、とりわけ盟友山崎さんを失つてからの2年半の心中は、いかばかりであつただろうか。

霧訪山には2009年12月に本間さん、山村さんを誘つて登りましたが、その時は山崎さんを追悼する気持ちがありました。その後、北海道に移住してしまいましたが、あのすばらしい展望を有する頂きに今度は石井さんを偲んで登る機会があればいいと思つています。合掌

アンナプルナー一周トレッキング

佐藤 久尚 (昭41年卒)

2010年の秋、佐藤久尚(昭41)、岡田健志(昭42)、中村雅明(昭43)の3人は、ネパールのカラバタールとゴークョへのトレッキングを楽しんだが、2011年も同じメンバーでアンナプルナー一周のトレッキングに行ってきた。当初、今回は目先を変えてカラコルムのバルプ氷河(最終目的地ラツシュピーク5098m)へのトレッキングと、その後、クーンジェラブ峠を越えてカシユガルに出て天山南路をバスでウルムチまで行くという旅を計画していたが、3月のウサマビンラディン殺害後のパキスタンの治安情勢の悪化から、計画を変更して再度ネパールのトレッキングということになりました。

幸い、トレッキング中は、3人とも体調を崩すことも無くトロンパス(5416m)を越え、予定どおり全行程を踏破することができました。また、天候にも恵まれアンナプルナを始めヒマルチュリ、マナスル、ダウラギリ



リ等の雄大な景観を十分に堪能することができました。以下、旅の概要をご報告します。

(旅程)

10月24〜25日(成田↓広州↓カトマンズ)

10月24日発の中国南方航空で広州經由カトマンズへ。広州ではほぼ一日時間があつたので、中山記念堂、越秀公園、南越王博物館等を観光。

カトマンズでトレッキングエージェンツ、

およびガイド(ニム・マガール、25歳、マカール村出身)と打ち合わせ。

10月27日(カトマンズ↓ブルブレ)

10月27日にガイドがホテルに迎えに来る。タクシーでニューバスパークへ。バスパークでポーター二人(ビム、22歳、ダルモ、20歳、共にマカール村出身)と落ち合い、10:00発の乗り合いバスでブルブレ(800m)へ向かう。バスは車両が古いので途中で故障でも起きなければいいがと心配したが、案の定、4時間余り走つたところで、突然ガタンガタンと何かが地面を摺るような大きな音がして止まってしまった。

外に出て見ると、動力を後輪に伝えるプロペラシャフト(推進軸)が外れるという日本では考えられないような事態が発生していた。これは大変なことになったと心配しながら見ていると、驚くなかれ、運転手と車掌が車の下に潜り込んで1時間程度で直してしまふ。ネパール人も「なかなかやるわい」と感心する。

ブルブレ迄の道路は、最初はカトマンズ〜ポカラ間の幹線道路を行くので、それ程悪くはない。しかし、途中から幹線道路をはずれマルシャンディの谷に分け入る道路に入ると、道も細くなり徐々に悪くなる。そしてベシサハールという最後の街を過ぎると本当の

悪路となり、バスの揺れもひどい。インドのバス旅行の経験から得た知識で、最も揺れの少ないバスの前輪と後輪の中間の座席を確保して座っていたが、それでも時々前の座席に膝をぶつけて痛い思いをする。ブルブレ着16:30。

10月28日～11月1日(ブルブレ→マナン)

現在、マナンまで自動車道路の建設が進んでおり、ブルブレから歩いて5～6時間のシャンゲという所までジープが利用できるという情報を得ていたので、ブルブレでジープを探す。しかし、ちょうど日本の正月にあたるタハールの祭りの最中であつたため、ジープが出払って無いらしい。約10キロ下流の街、ベシサハールから呼ぶと20000Rs(約2万円)かかるというので、ジープを諦めてブルブレから歩くことにした。ブルブレからはマルシャンデイ川に沿った街道をジャガット、バガルチャップ、ツァーム、ピサン(の村々)でそれぞれ一泊ずつしながら、マナンまで5日間かけて歩いた。

マルシャンデイの谷は、去年歩いたドウードコシ(エヴェレスト街道)よりも全体的に広く明るい感じで、各所に畑や森が広がっていて緑も多い。ブルブレを出て2時間も歩くと早くも右手にヒマルチュリがその雄姿を現わし、その左の尾根越しにマナスルが真っ白

なピークを見せてくれる。さらに谷を進むにつれてアンナプルナ山群の山々が次々と視界に入ってきて、歩いていて飽きることがない。また、エヴェレスト街道に較べるとトレックカーの数も少なく(10分の1以下か)、途中の茶店やロッジも空いていて、落ち着いて食事や宿泊ができるのがいい。さらに、団体のツアーとレックカーがほとんどないので、各国(英、仏、独、伊、スペイン、オーストラリア、イスラエル、中国等)から来たトレックカーと気楽に言葉を交わしながら行けるのが、また楽しい。

11月2日(マナン滞在)

マルシャンデイ峡谷最大の村、マナン(3440m)で一日滞在中に休養にあてる。マナンは、テイルマンが「ネパールで一番美しいところ」と言ったと伝えられているが、確かに、背後からガンガブルナのアイスホールやアンナプルナII、III、IV峰の雪壁が屏風のように迫り、それが広く開けたマルシャンデイの谷と調和して、何とも言えない美しい風景を作り出している。

この日は高度順化と写真撮影を兼ねて岡の中腹にあるプラケンゴンパ(3900m)まで登った。ゴンパからの眺望は雄大でしばらく見取れてしまう。ゴンパで一人100Rsのお賽銭を払って僧侶に旅の無事を祈っても

らい、一人ひとり毛糸でできたお守りを首に掛けてもらおうと、何となくこれで無事トロンパスを越えられそうな不思議な気分になった。

11月3～4日(マナン→レダー→ハイキャン)

今日から4000mを越えるので、気を引き締めてロッジを出立する。レダー(4230m)、ハイキャン(4925m)ともロッジの数が少ないので、ガイドを部屋の確保のために先発させて、我々はビスタリ、ビスタリ(ゆつくりゆつくり)で登る。そのせいか高度の影響をほとんど感じることなく比較的楽にレダーおよびハイキャンに着いた。なお、レダーに行く途中右手にチュル山群のピークがその高度以上に立派に見え、緑の少なくなつた単調な景観にアクセントを付けてくれた。

11月5日(ハイキャン→ムクチナート)

今回の旅のハイライトとも言うべきトロンパス(5416m)越えの日。午後になるとカリガンダキ側からの風が強くなるというので、早朝4時にハイキャンを出発する。真っ暗な中をライトを頼りに黙々と登る。道は予想していたよりもなだらかで歩き易い。峠に近づくにつれ風が強くなり猛烈に寒くなる。中村氏が持参した温度計を見るとマイナス13度を示していた。毛糸の帽子を持って行か



ガンガブルナ（中央の白いピーク）とアンナブルナ

なかったので、タオルとマナンで買ったネパール式ネツカチーフで顔を覆ったが、それでも頬が凍傷になるかと思うくらい寒かった。峠に105到着。峠はかなり広く周りには雪があったが道には雪は無い。石積みの小さ

な茶店があったので、入って紅茶で暖を取る。峠に着いたら食べようと思つて持参した虎屋の羊羹を切つて配つたが、岡田氏などは「寒さで口が強張り、直ぐには食べられない」と言つていた。

茶店に30分もいると後続のトレックカーが上がつてきて狭い茶店が満員となつたので、外に出て記念写真を撮り、早々に下山にかかると。下るにつれて太陽が昇り風もおさまつてきて、先ほどの寒さが嘘のような穏やかな天気となる。峠からちよつと下るとカリガンダキの谷を隔てて？手正面にダンブス・ピークが、その左にツクチェ・ピークが望まれるようになり、さらに下つて行くと猛烈な雪煙をあげたダウラギリI峰の雄姿が、また、逆光の中にニルギリの優雅な姿も見えてきた。さらに東に目を転じるとムスタンの山並みも視界に入る。これらの山々の眺めを楽しみつつ写真を撮りながら1600mを快調に下り4時間弱でムクチナート(3800m)に着いた。

ムクチナートは昔からの有名な聖地で、観光客やここを目的地とするトレックカーで急に賑やかになる。ムクチナートでは、代表的なヒンズー教寺院とチベット仏教寺院の二つを見学したが、チベット仏教寺院では、前からは非見てみたいと思つていた聖なる火(祭壇

の下をのぞくと真つ暗な中に二つの炎が見えて、「一つは石が燃えている」、「いま一つは水が燃えている」と言われているが、実際は両方とも天然ガスとの由。この火については河口慧海も見たと旅行記に記しているが、それにしてもこんな所に天然ガスが出るというのは不思議な感じがする)を見られて何か得した気分になる。

二日、ムクチナートの宿に到着(実際にはムクチナートにはロッジは無く15分くらい歩いたラニポーワという所にロッジがある)。早速ビールで無事トロンパスを越えた祝杯をあげる。なお、ここでトレッキング開始以来、初めて日本人トレックカー(中年の男女のカツプル。トロンパスを越えて来た感じではなかった)に会つたが、エヴェレスト街道に較べてトレックカーの数が少ないとはいえ、ここ迄日本人に一人も会わなかつたというのは意外であった。

11月6日(ムクチナート→タトパニ)

ムクチナートからは自動車道路ができていて、時々、車とすれ違うたびに猛烈な埃を浴びて不快な思いをするが、周囲の景観を楽しむためには歩かなければと、タトパニ(1200m)まで歩くことにした。道はカリガンダキ川に沿つて下ることになるが、車が通るようになったとはいへ、昔のチベットとの主

要な交易路であっただけに、途中の集落には家並みや道路などに昔の名残が残っていて、我々の目を楽しませてくれる所が各所にある。こうした村や街の風情を楽しみながら歩くのも、ネパールでのトレッキングの醍醐味のひとつと言えよう。ただこの道は、午前中は上流から、午後は下流から決まって猛烈な風が吹くので、マスクとメガネは必携である。

このカリガンダキ名物の強風に煽られながら、アンナプルナーI峰、ダウラギリI峰、ニルギリなどマルジャンディ峡谷とはまた違った山々の眺望を楽しみながら、ジヨムソム、コバーン、ガーサと泊って4日間かけてタトパニに出た。途中、カグベニでは由緒あるゴンパを、マルファアでは河口慧海記念館（明治33年に河口慧海がチベット入りする直前にしばらく住んだという住居に、彼が残した所持品が展示されている）を、さらにジヨムソムから1時間ほど歩いたサヤンという所では、日本のNPO、ムスタン地域開発協力会が運営する農場を見学して、いろいろ興味深い物を見たり話を聞いたりした。特に、サヤンの農場では新潟県警を最近定年退職し赴任してきたカネコさんという方から、農場の運営から農場で作っているリンゴや野菜、稲作、養魚場で育てている魚の話など本当に貴重な話を伺ったが、紙幅の関係でここに紹介でき



トロン・ラにて。左から 岡田、佐藤、中村

ないのが残念である。

トレッキング最後の地、タトパニでは天然かけ流しの温泉（但し水着着用、入場料50Rs、マッサージの小屋まで併設されているのには驚いた）に入り旅の疲れを癒した。

11月10日（タトパニ→ベニ→ポカラ）

タトパニ→ベニ間は、カリガンダキの谷も狭まり景観もあまり期待できそうもないので、最初から車を使う予定であった。前日、

タトパニのロッジに着いた時、ロッジの主人に聞くと「ジープなら7000Rsかかる。但し、今はハイシーズンなのでジープがあるかどうかは分からない。バスもあるが不定期で客が集まり次第出発するので、何時に出るか分からない」とのこと。

ガイドに車を確保するように言い付けておいたが、夕方になっても車を確保したという報告がない。心配になって、暗くなってしまうが、車の自動車の溜まり場に行ってみると、運よくタクシーが2台止まっていた。交渉すると2台で5000Rsでベニまで行くというので、前金を一部渡して明朝の出発ということに予約した。

果たして約束通りタクシーが待っているかどうか心配しながら駐車場に行くと、ちゃんと待っていた。早速3人ずつに分かれて乗り込みベニに向かう。途中、道が悪くて頭をタクシーの天井にぶつけることが何度かあったが、2時間強でベニに着く。ベニからは、乗り合いバスでポカラへ。バスがヤナプールへの峠を登るあたりで、アンナプルナー南峰と名峰マチャプチャレの迫力のある姿が車窓からよく見えた。途中、訳も分からず別のバスに乗り換えさせられるというハプニングがあったが、ポカラには昼少し過ぎに着いた。

ポカラではポーターと過ごす最後の晩にな

るので、「たべもの屋」という日本食レストランに行つて、セットメニュー(冷や奴、豆腐の白あえ、オカラ、サバ塩焼き、味噌汁、ご飯)をポーターとガイドにご馳走した。ポーターは「豆腐もサバも初めてだが美味しい」と言つて食べていたが、翌日、ガイドが言うことにはポーターは下痢をしたとのこと。ガイドの報告を聞いて「まさか」と、思わず3人で顔を見合わせ笑つてしまつた。

ここで食べ物に関連して面白い話をもう一つ。ガールという村のロッジでのこと。夕食を食べようとしてメニューを見てみると JAPANESE という文字を発見、これまでどのロッジでも JAPANESE と書かれたメニューを見たことがなかったので、驚いてよく見ると、その下に「お好み焼き」ならぬ OKONOMIYARI と、また、「オムライス」ならぬ OMIRASU と書いてある。面白いので OKONOMIYARI を注文して食べてみたが、その評価は3人で分かれるところとなつた。それにしてもエヴェレスト街道のロッジでもそうであったが、メニューに JAPANESE が無いのが不思議である。その代りに MEXICAN (と言つても何故か自身はスパゲッティとパスタであるが)と書かれたメニューが結構ある。トレッカーの数から言つてもメキシコ人よりも日本人の方がずっと多いだろうし、

費用実績(一人当たり 円/人)

換算率: 1\$=79円、1Rs=1.017円、1元=13.8円

		個人負担	備考
交通費	<航空運賃>	85,046 円/人	
	<バス、タクシー代>	4,332 円/人	
	<航空運賃、バス、タクシー代 計>	89,378 円/人	
エージェントへ支払い	<エージェントへ支払い>	46,636 円/人	*1
宿泊費と食費	<食費、宿泊費 計>	37,081 円/人	20泊分
	<その他経費 計>	2,724 円/人	*2
ポーターチップ		1,220 円/人	1,800Rs*2人
ガイドチップ		1,017 円/人	3,000Rs
	<ガイド、ポーターへのチップ 計>	2,237 円/人	
合計	<合計>	178,057 円/人	

*1 <3人分・US\$>

ガイド雇用料	765	17日分
ポーター雇用料	800	16日分
アンナプルナ国立公園入園許可証	86	2,000Rs/人
TIMS許可証	30	
同上申請手数料	30	
カトマンズ⇒プルブレ バス代	60	

<1,771>

*2 Bhaktapur 行きのタクシー、入山料・温泉入浴料・山岳博物館入館料・貸し自転車料金等々

MEXICAN でなく JAPANESE があってよさそうなものだが。それとスパゲッティやパスタが何故 ITALIAN でなく MEXICAN なのか。この謎は解明できなかった。

11月11～14日(ポカラ→カトマンズ↓成田)

ポカラで一日滞在。ポカラでは5時間200Rsでマウンテンバイクを借りて市内を回るとともに、国際山岳博物館やパタレチャンゴ(峡谷と滝からなる特異な地形)などの名所を見物して過ごした。ポカラはカトマンズに較べると車の数も少なく街も小さいので、自転車で回るのが丁度よい。

ポカラからはカトマンズにツーリストバスで出て(約7時間)カトマンズで各自、観光や買い物を楽しんだ後、23:00発の中国南方航空で広州経由(広州空港で約4時間半待ち)成田に帰国した。

アンナプルナー一周の旅で見た高峰

	10月28日	29	30	31	11月1日	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
●:初見 ○:2日目以降															
1 ヒマルチュリ (7,893m)	●		○												
2 マナスル (8,163m)	●		○												
3 ビサン・ピーク (6,092m)				●											
4 ガンガブルナ (7,454m)					●	○	○								
5 アンナプルナⅠ峰 (8,091m)											●	○	○		○
6 アンナプルナⅡ峰 (7,937m)				●	○	○	○								
7 アンナプルナⅢ峰 (7,555m)				●	●	○	○	○							●
8 アンナプルナⅣ峰 (7,525m)					●	○	○	○							●
9 アンナプルナ南峰 (7,219m)												●	○	○	●
10 ティリチョ・ピーク (7,134m)					●	○	○								
11 オムミルバ (5,039m)						●	○								
12 カンサル・カン (7,485m)						●	○								
13 チュル西峰 (6,419m)							●	○							
14 チュル主峰 (6,584m)							●	○							
15 チュル東峰 (6,429m)							●	○							
16 トロン・ピーク (6,144m)								●	○						
17 ブルク (6,166m)								●							
18 プルバン・ヒマール (6,500m)								●							
19 ジンジャン (6,111m)								●							
20 ダンプス・ピーク (6,035m)									●						
21 ニルギリ北峰 (7,061m)									●	○	○				
22 ニルギリ主峰 (6,940m)										●					
23 ニルギリ南峰 (6,839m)										●	○	○	○		
24 ツクチェ・ピーク (6,920m)									●		○	●			
25 ダウラギリⅠ峰 (8,167m)									●	○	○	○	○		
26 マチャブチャレ (6,993m)														●	○
27 ラムジュン・ヒマール (6,986m)															●

絶景ビューポイント・ベスト3

- 1 マナン プラケン・ゴンパ(11月2日 10:30頃)
マナンの上方3,900m、山の斜面の小さなゴンパ(Praken Gompa)はアンナプルナ山脈の絶好の展望台。左からアンナプルナⅡ峰、Ⅳ峰、Ⅲ峰、ガンガブルナが連なり、さらにその左にオムミルバ、カンサル・カン、ティリチョ・ピークまで続く、正に180度の雄大な展望は見飽きることはない。
- 2 コバンの先のカリ・ガンダキカの河原(11月8日 8:40頃)
カリ・ガンダキの河原越しに見る紺碧の青空をバックにそり立つダウラギリⅠ峰とその右に聳えるツクチェ・ピークの雄姿は圧巻。前山の岩と緑とダウラギリの氷河のコントラストが素晴らしい。
- 3 ガーサから2時間半のダナからの街道
アンナプルナⅠ峰とその右手のアンナプルナ南峰が近くにつれ、次第に全貌を現していくのが楽しい。振り返るとニルギリ南峰がずっと見えるのも良い。

私の現役時代

俵 昭(昭44年卒)

一九六五年から一九六八年に至る四年間が私の現役時代です。今から40年以上も前のことである。針葉樹14号を手引きにして記憶を引き出してみました。瑣事にわたることになりませんが、ご容赦ねがいます。

新人山行から一人歩きまで

一九六五年、五月連休を利用しての新人山行は鳳凰三山でした。CLは高崎俊平さんで、サブは平川紀男さんです。新人は五名参加だったと記憶していますが、『針葉樹』には抜け落ちていきます(32頁、205頁)。夜の新宿駅に小島和さんが見送りに来られ、どのような山登りをしたいか」と問われましたが、何と答えたのか忘れられました。夜又神峠から歩き、順調に行程を進めます。休憩を終えて出発する時の高崎さんの気合「ケツパッティコウ」が隊列を引き締めます。広河原峠に着きました。

翌朝、目覚めると外は銀世界に変わっていて雪が勢いよく降っています。そして夜又神峠から先になり後になりしていた二人パーティーの一人が急死したという。広河原に遺体と共に下りることになりました。遺体と荷物に分けて班別に運びましたが、一人が故障を起こすと九分の一の負担増という算数は成り立たないのです。端から、いろいろ勉強させてもらいました。四つに折られて背負子に括りつけられた姿に暗然としました。これが山岳部での初めての山です。

その後、山以外の生活にいろいろとあって、私はフラフラとはつきりしない部員になり、夏山を不参加、秋山に出て冬山は一年休みと、半分も活動しないというひどい有様でした。

こんなことではいけないと気持ちを変えて取り組んだのが六六年の春山です。CL岡田健志さん他六名で、南アルプス三伏峠から稜線を歩き、塩見岳・北岳に登るという計画です。間ノ岳頂上直下に幕営して沈澱が続いたが、台湾坊主に北岳辺りも強襲されるという気象状況になった。避難することになり、悪い八本歯を時間差で通過して池山吊尾根に下る行動がとられた。その八本歯でルート工作中に故障者が発生し、急ぎテントを張ることとなった。岡田さん、宮武さんと三人でテントを組み立て始めたが、私はフレームのポー

ルを風に取りられ流失させてしまった。大失策である。

テントは立たず強風の中で被って徹夜した。ピニロンのヤツケの背が凍った。みじめな長い夜でした。強風は台湾坊主の二つ目でした。翌朝、岡田さんがポールを回収してくれたのは本当に幸運でした。その日は休養して翌々日から故障者を背負って下山を始めました。

そして八本歯でのトラブルから六日目にして漸く野呂川発電所にたどり着きました。夜又神峠への道路が谷に落ちていて、Uターンしてきたのです。故障者も大事に到らず下山しました。一年にとって恐ろしいことも嬉しいことも体験でき、フラフラした気持ちは消えました。そして山行日数が増えました。六六年六月には、上旬白馬岳、中旬槍穂高前期合宿、下旬鹿島槍ヶ岳に行っている。

白馬は岡田さんのお誘いでした。黒部の黒薙から猫又山に上がり白馬岳に到るといっても登山道はありません。急斜面の藪漕ぎには苦しめられました。なかでも石楠花は反撥が粘っこくて厄介でした。やがて雪の斜面に出たが、ガスで上方の見通しはありませんから動きがとれません。泊まりとしました。

この山行では冬山用テントにフライの組み合わせとしました。三日間停滞となり雨も降り

ましたが雨風を遮断して快適に過ごせました。テントの固定は立木を利用しました。以後、多用した組み合わせです。四日目に晴れ上がり白馬の大雪渓をグリセードで滑り下りました。残雪期の山のすばらしさを知った山行です。

中旬の前期合宿とは、二年一年のみで行う合宿です。岳沢・澗沢・槍沢で雪上訓練をして前穂高岳、奥穂高岳、槍ヶ岳に登頂しました。松本に下山後、信州大学の寮に泊めてもらい、翌朝一人で大糸線築場から大谷原に入り、大川沢の造林小屋の少し上流の河原に露營しました。鹿島槍ヶ岳荒沢は山岳部と深い縁があります。この山行は初めて一人で計画して一人で登る山行です。

翌日は晴。荒沢出合から忠実に沢をたどる。慰霊碑が次々と現れる。流れは細い。雪は沢に段差がある場所で吹き溜まりのように残っている。雪の上上がらないように右側を巻きます。右側は天狗尾根側で逃げ道としました。東尾根側は切り立っているところが多く、冬でも沢に入ることは難しそうです。荒沢尾根のアプローチに使うというコルの位置もよく判りません。荒沢尾根と思しき筋は緑が豊かではつきりしません。

末端辺りで右側の北俣に入る。ここまで来ると天狗のコルが目安となります。沢は急に

せり上がって来て雪の量も多くなる。右ルンゼの右側に立って奥壁をみる。右ルンゼを埋めた雪は両側が早く解けてドーム状になっているが、割れ目から見ると内は空洞になっている。右ルンゼを横切らないと岩壁に取り付けない。恐ろしいが頑丈そうなところを選んでそろそろと左側に移る。岩肌は波打っておりフリクションもよく利いて登り易い。でも雪がついたら厄介だろう。小舎岩に着いて大休止をとる。森の中に忽然と現れた採石場のような荒沢奥壁でした。

一年後と二年後に天狗尾根を通りましたが荒沢には入っていません。以上が今振り返っての私の現役時代の私なりの山登りのエッセンスです。

卒業まで一緒に登った同期の仲間は宮武幸久、藤原朋信の二名です。宮武は六七年ヒンズークシユに遠征した。山は滅法強くて、山岳部では五年間活動を続けた。藤原は二年から入部した。勤務先のクラブで登り続け百名山を踏破した。クライミングのトレーニングを怠らず、今も岩登りの現役という息の長さです。

OBとの交流

現役がOBといつでも一緒に活動する場があるというのは、山岳部の特色でしょう。私

自身現役時代にOBに接し多大な恩恵をうけております。最初は六六年五月の遠見尾根合宿でした。上高地からテントを運び、お駄賃に小島さん、佐藤（久）さんのお供をして五龍岳G2中央稜を登らせてもらいました。六七年の穂高合宿にも参加させてもらいましたが、なかでも印象に残っているOBとの山行は六七年六月の北穂高岳です。

メンバーは大塚武、山田亮三、中島寛、平川紀男の諸先輩と私です。先輩方は皆さん鬼籍に入られました。滝谷をさかのぼって北穂に登るといふ計画です。新島々から車で新穂高温泉に行き槍平にテントを張る。翌日大滝の落ち口から滝谷に入る。ガスがかかり雨模様だが雪はほどよく締まっている。大塚さん、山田さんはアイゼンをつけて徘徊される。昔日の登攀を憶んでおられるのか。

風雨が強くなった北穂小屋では、大塚さん、山田さんが学生時代の思い出を語られる。私は「学生としてどのような山登りをやったらいいとお考えですか」とお二人に尋ねてみた。「岩や雪に偏ってはいけけない。藪漕ぎから沢登りまで広くやるべきだ」「PRIMITIVEな山登りをとやうことかな。頭を軽く振って話される大塚さん、ウーンと破顔一笑されて話される山田さんの姿が浮かんできます。貴重な助言でした。

これは現役時代のことではないが、針葉樹会の有り様を現していると信じているので追加します。七一年一二月、中川孫一元会長が丹沢大野山方面に出かけたまま行方不明になるという事故がありました。会員は如水会館に集まって対応を協議しました。

其の時のことです。近藤恒雄先輩が発言を求めて立たれます。机に両手を置いて、「だから独りで山に行ってはいけません。横に座っている村尾金二先輩が合わせる。「そう、独りで行ってはイケナイ」。間髪をいれず「そんなことを云われたって行きたい時は独りでいきますよ」との発言があった。その発言の主は山田亮三さんであった。このやりとりはどのようなに結着したのか記憶にない。友を惜しみ気遣う心と自由・自主を尊ぶ心が中川さんのことを思っただけに出たのだと思います。針葉樹会はこのような会なのだといたく感心しました。

終わりに

私は六八年五月連休合宿、鹿島槍ヶ岳天狗尾根で死亡事故を起こしました。その收拾にあたり針葉樹会の皆様が大変なお世話になりました。本当に多くの方が動いて下さいました。今、改めて深く御礼申し上げます。

ニュージーランド山岳会の 名誉会員になる

中村 保 (昭33年卒)

「サブライズ」だった。ニュージーランド山岳会 (New Zealand Alpine Club=NZAC) からの招聘により、二月大地震の復興の最中にあるクライストチャーチで5月20日に「最後の辺境——チベットのアルプス」の講演をした。

講演が終わって名誉会員認証を告げられた。事前に知らされてなかったので驚き感動した。これで、英国アルパインクラブ、アメリカ山岳会、ヒマラヤンクラブ、ポーランド山岳会、日本山岳会と、六つの世界の山岳会の名誉会員にして頂いたことは登山家としてこの上ない光栄である。

企業戦士として波乱万丈のプロジェクトで6年間苦闘したニュージーランドは、私の第二の故郷である。感慨ひとしおであった。ニュージーランドでの仕事に巡り逢わなければ、次の赴任地であった香港に駐在する機会

はこなかったろうし、「チベットのアルプス」が定年後のライフワークになることは無かったろう。

クライストチャーチでは現会長ピーター・キャンメルさん(50歳)以下、皆様に大いに歓待を受け、クライストチャーチでの講演には160名を超える方々が来場してくれた。

切符は全部売れ切れたという。若い登山家も多くいた。ヒラリーとともに1953年エベレスト隊のメンバーであり、1955年にカンチェンジュンガにジョージ・バンドとともに初登頂したノーマン・ハーディーさんもおられ、親しく接することができた。嬉しい出会いだった。日本山岳会のクラブ・タイと百周年記念の冊子を差し上げた。

講演の返礼にニュージーランド登山ガイドブック(全9巻)を頂いたので日本山岳会の図書室に寄贈した。著名な南極探検家で写真家のコリン・モンティースさんからは素晴らしい写真集、目を洗われるような美しい新刊『南極—沈黙の土地』を頂いた。

今回の名誉会員認証は存命会員では7人目である。登山家ではジョージ・バンドの名があり、植物学者、自然環境保護に貢献している方々がいる。物故名誉会員はN・E・オー

デル、エリック・シプトン、ジョン・ハント、チャールス・エヴァンス、テンジン・ノルゲイなど13名である。エドモンド・ヒラリーはなぜ名誉会員ではないのかと訊いたところ、ニュージーランド山岳会会員は名誉会員にしないという規約があり、代わりに終身会員にしているとのことだった。ノーマン・ハーディーさんも終身会員である。

ニュージーランド山岳会の歴史は日本山岳会より古く、創立は1897年である。現在の会員は北島1500人、南島1550人、計3050人。コミッティー・メンバーは25名、年会費は7800円。

人口400万人の国に3千人もの会員がいて、年齢構成は偏っていない。英国の伝統を継ぐ正統的な登山文化がしっかり根付いている。パブリシティーは多彩である。年間のジャーナル以外に、『ザ・クライマー』という立派な季刊の山岳雑誌を出版している。美しいカレンダーも作っている。会長は50歳と若く、活力が感じられる。年齢構成も平均45歳と若い。年齢グループ別の構成をNZACと英国アルパインクラブ (Alpine Club=AC) を並べて比較する。

90周年事業準備状況

	NZAC	AC
30歳以下	482人	25人
31歳～50歳	16%	2%
1407人	46%	368人
51歳～70歳	31%	29%
937人	31%	554人
70歳以上	7%	44%
224人	7%	554人
メンバー合計	313人	25%
3050人	1260人	
平均年齢	45歳	58歳

極端に高齢化している日本山岳会（平均年齢70歳）とは対照的である。

講演はキャンメル会長、オリィ・クリフトン事務局長とイベント担当バット・ディーボルさん（世界的に知られている女性クライマー）が諸事段取りをしてくれた。ヒマラヤンクラブが縁で、長く親交のある元会長で現在国際山岳連盟（UIAA）役員のジョン・ナンカピスさんが、講演に先立ち小生を丁寧に紹介してくれた。ジョンとは10月上旬のカトマンズで開催されるUIAA年次総会で再会する。

昨年の総会で承認された90周年事業につきましては、以下の4プランにつき針葉樹会員有志により更に検討・準備が進められており、3月末には針葉樹会の正式承認手続きをお願いする段階になります。

- 1 『針葉樹』15号発行
- 2 学生との富士登山
- 3 芦安活性化支援
- 4 記念総会

この活動に必要な資金的裏づけのために、昨年制定された賛助金につきましても既に20万円を超える額が寄せられています。90周年事業の実施のためには更に最低50万円以上の賛助金が必要とされます。会員の皆様のご協力を、この場をお借りしてお願いいたします。

今回は上記事業のうち、芦安関係の準備の一環で針葉樹会員が芦安・夜叉神の山道修理に参加した報告を、本間会員にお願いし、宮武会員が「芦安ファンクラブ通信」（第43号秋）に寄稿した記事を転載してご参考にしたと思います。

（小島和人）

夜叉神峠西口登山道づくりに参加

23年10月22日（土）～23日（日）に恩賜林100周年記念事業として、夜叉神トンネル西口～夜叉神峠の登山道復旧工事を行う旨の連絡を受け、5人（上原・小島・中村・宮武・本間）が参加しました（労働力としてよりも、作業とは？を知るために参加。そのため針葉樹会員の参加範囲を広げませんでした）。

22日7時半集合のため前日芦安に入り、前回の訪問で雨のため行けなかったII高谷山～カンバ平～檜尾峠～トンネル東口を廻ってきました。カンバ平までは、野呂川を挟んで白根三山に対し、天気が良いと思ったらさぞかし素晴らしい眺めであったであろうと思えました。カンバ平の整備、その先のシラビソ台も将来の作業候補地です。

22日～23日 作業

技術力の無さは体力でと5人、ボツカ班を志望。6尺の丸太（路作りのメイン資材II階段・土固めに）2本を背負いスタート。他に道の均し、拡幅・足場切り等を行う。工事の出来る地元の男女の主要メンバーと作業後の登山道の足踏み班の中老年女性（賛助会員）もいるという、気配りの利いた組み合わせで、



10月22日 13:42 丸太を使つての道作り (右端が宮武)

■登山道づくり体験

宮武 幸久

夜叉神峠西口登山道が見事に復元されました。芦安ファンクラブを始め、参加された皆

無理のないボランティア参加の催しでした。終了後には森林講座もあり、楽しく2日間を終えることができました。
〔カンバ平周回路 補修整備事業〕本間浩より抜粋)



10月22日 15:53 作業終了後に全員で

(後列) 右から1人目が中村、3人目が宮武
(前列) 左から2人目が本間、3人目が小島、右から2人目が上原

様「お疲れ様」でした。優れた指導者と手慣れた連中が集まれば登山道の整備ということも予定通りに、しかも嬉々として楽しみながら完成させることが出来るんだと実感しています。
会から5名が参加しましたが、それは数年前、塩沢館長のご尽力により芦安山岳館に針

葉樹会蔵書コーナー」を設けていただき、そのお礼をと考えていた時に今回の企画に恵まれたからでした。道づくりには全くのシロウトの私に何が出来るんだろうかと不安な中、10月22日雨が降りしきる朝始まりました。

清水リーダー以下総勢20数名、標高1380mの西口からおよそ400m上の峠までの約1.5km、概ね400kgの資機材の運搬と道の整備です。先導隊・ポツカ隊・草刈隊に分けられ、私は他に出来そうにないのでポツカ隊に入り、結局この日2往復することに。1本5kgの丸太を迷わず2本(3本の方も大勢いました)背負子に括り歩き出しました。標高1500m位の第一テント場までの直登は悪路とも重なりかなりシンドク、2本で正解という思いでした。

テント下の急斜面には、階段づくりが始まっていて、2回目の時はほぼ完成というところでした。かねがね山の階段は段差があり歩きづらいと不満を持っていましたが、なんと浅薄なことで反省するに到りました。段差は斜面の角度によって自ら決まってしまうものだからです。

標高1700m位の第二テント周辺は水場があり藪に覆われた危険箇所です。リーダーから「その檜の木を切れ」と声がかかり30m位下の沢沿いの倒木を2本、道の上まで引

三月会通信

■平成23年10月17日■

【出席者】佐藤、三井、高橋、小島、佐藤(久)、宮武、兵藤、記録Ⅱ高崎(俊)

き上げ、「どうするんだらう」と見ているうちに倒木は桁になり、打ちこまれた杭としっかりジョイントされ「立派な」橋が2ヶ所出来あがりました、杭の不揃いなのは打ち方の下手な私のせいです。

予報に反し素晴らしい天気恵まれた2日目は、道幅を拓ける若干の手直し、重量隊による踏み固め、そして道案内のための真新しく真紅なテープを樹々に巻きつける仕上げ作業の後、正午すぎにそれまで峠にあった「西口通るべからず」の看板を取り外すことが出来ました。

高みを目指した先人達を通ったであろう峠はその役目を終え、今日、峠そのものを目標にやって来る方々のために少しはお役に立たたかなと思うと感謝の気持ちで一杯です。本当にありがとうございました。

(追記) 芦安のアルカリ性の温泉が痛めた腰に効くこと、2日目作業終了後、夜又神峠東口登山口まで「森林樹木講座」がありました。が、その時の斉藤講師が(立川)高校の先輩であることが解り喜びが倍増しました。

(芦安ファンクラブ通信 第43号秋)より
転載／一部改訂)

▽定例の第3月曜日。インドネシアのジャカルタに4年強駐在されていた兵藤さん(昭和52年卒)が久しぶりに参加されました。インドネシアの山は「もう飽きた」ほどよく登られた様子です。インドネシアには標高3000mを超える山が13座もあるそうですが、雪は無く、富士山のような山容の山で、大部分が頂上まで樹林帯の中だそうです。パプアニューギニアには5000mを超える山もありますが、アプローチにジャングルを1週間は歩く必要があります、なかなか食指が動かない、との話でした。

▽今月の22日(土)、23日(日)に、芦安ファンクラブ・芦安山岳館主催で山岳自然教室が開かれ、日曜日には、いよいよ登山道の整備が始まります。針葉樹会からは上原さん、本間さん、小島さん、中村さん、宮武さんが参加されます。「俺もやってみよう」と思われる方は、小島さんに連絡して下さい

い。天候が気になるころではありませんが、22日(土)の朝、「あずさ1号」を使って、甲府に集合です。

▽体調が万全ではなかった高橋さんが元気な顔を見せてくれました。心房細動(不整脈)が原因で、「脑梗塞」が発症しやすい、普段の行動も2時間以内に医者に行ける範囲、と制限されているそうです。従ってこの範囲内での山登りはかなり難しくなっています。近々、中国の「百名山」に登るために中国の銀行に預けてある大金を引き上げに行かれるそうです。

▽鎌倉の朝比奈の切通しは、動力のない時代にどうやってあれだけの大土木工事が可能だったのか、に始まってひとしきり「鎌倉街道」談義になりました(朝比奈切通しの由来については、平安時代から昭和の戦後に至る歴史があるようで、諸説紛紛です)。また、巻機山の懇親山行の直後でもあったので、清水部落から湯檜曾に抜ける旧国道は、清水峠を越える道か、蓬峠を越えるのか、の話になりましたが、確答は得られませんでした。三国峠を越える国道が出来るまでは「国道」らしく整備された道路だったようです。

▽第2回富士山学講座(講師は言わずもな、富士山学博士・佐藤さん)

今回は「世界文化遺産としての富士山」に
関して。

「世界自然遺産」としては、富士山は基準
にミートしないが、「文化遺産」としては登
録が可能なようなので、静岡県・山梨県、
関係市町村などが連携して、登録の申請に
向けて取り組むことになった。富士山の顕
著な普遍的価値を「信仰の対象」「名山とし
ての景観」「芸術の源泉」の観点から証明す
る。このためには25の「構成資産」に万全
な保護措置を構じる必要がある。このよう
な動きを背景に、今日は特に麓に散在する
「浅間神社」と「富士講」に関するお話が中
心になりました。

浅間神社の本宮は南麓の富士宮市にある
富士山本宮浅間大社（南に開けて明るい感
じがする）、吉田口登山道の入口にあるのは
北口本宮富士浅間神社（鬱蒼とした林に囲
まれて暗い感じがする）、この他に、「山宮」
「村山」（ともに富士宮市）「須山」（裾野
市）「須走浅間神社」（小山町）「河口浅間
神社」「富士御室浅間神社」（ともに富士河
口湖町）がある。

「浅間」、「アサマ」は火山を示す古語で、
「阿蘇」も同系の言葉とされている。

「このはなさくやひめ」は火中出産伝説か
ら、富士山を守護する「火の神」とされた。

富士講は、16世紀後半〜17世紀前半（戦
国時代から江戸時代）にかけて、人穴（富
士山の噴火で出来た溶岩洞穴、富士宮市）
で修業した長谷川角行（角行藤伝）によつ
て提唱された。人穴浅間神社に隣接する「人
穴富士講遺跡」には碑塔が建立されている。
「人穴」と同様な溶岩洞穴では「船津胎内樹
型」「吉田胎内樹型」があり、浅間神社の祭
神である「このはなさくやひめ」の胎内に
擬される。

富士山に登る前には「水垢離」の行があ
り、「元八海」（現在の忍野八海）「内八海」
（富士五湖に加えて、四尾連湖、明見湖、須
戸湖）「外八海」（琵琶湖、諏訪湖、二見ヶ
浦ほか）などで行われた。内八海の「明見
湖」は富士吉田市、「須戸湖」は富士市と沼
津市にまたがった「浮島沼」。これは後に陸
化（40年前頃は、まだ沼の面影が残ってい
たが、現在では工場用地・住宅地になって
しまった）され、「泉水湖」（富士吉田市）
に取って代られた。

ところで、富士山の初登頂者は誰か？
伝説によると、聖徳太子が献上された「甲
斐の黒駒」に跨って3日で信濃遠征をした
時に登った説、役行者（役小角）が伊豆大
島に流刑されている時に、毎晩海上を歩い
て登った、の説がある。生きていた時代か

ら判断すると、聖徳太子の方が先になる。

●山行記録

佐藤 10 / 3 丹沢、塔・小丸 定例トレ

ニング、単独行

三井 9 / 28 ~ 30 29日に巻機山登山。井

戸尾根を往復、トータル12時間、きつかつ
た。

高橋 なし

小島 10 / 2 権現山↓弘法山↓吾妻山

10 / 3 聖峰↓高取山↓念仏山↓東海大
前。鶴巻温泉の大和旅館、まあまあです。

佐藤（久） なし

高崎 なし

宮武 なし

●山行計画

佐藤 1 ~ 2ヶ月の間、ちよくちよく丹沢を
歩く

三井 10 / 19 ハイキングで多摩丘陵（1

3・5km）。37年の同期と

高橋 予定なし

小島 10 / 26 谷川岳 天神平から

佐藤（久） 10 / 24 ~ 11 / 14 アンナプル
ナー一周トレッキング。岡田・中村さんと一

緒。

高崎 なし

宮武 なし

■平成23年11月21日■

【出席者】 佐藤、三井、遠藤、竹中、本間、小島、佐藤（久）、岡田、中村（雅）、宮武、記録＝高崎（俊）

▽開会前には、「90周年記念事業」計画の内、南アルプス旧芦安村にある「芦安ファンクラブ」との共同事業をいかに展開するか、の打ち合わせ（アルコール抜き）が白熱した雰囲気の中で行われていました。

▽11月3日に部室で恒例の「月見の宴」が開催されました。早目に集合して小屋周辺の草刈りから始まりましたが、盛況だったようです。また、将来有望な2名の新入部員も顔を見せてくれたようです。大いに期待すると同時に、支援しましょう。

▽佐藤（久）さん、岡田さん、中村（雅）さんの三人組は、今年もヒマラヤのトレッキングに出掛け、14日に帰国しました。今回は、当初カラコルム山域を狙って計画を立てていたが、例のビン・ラディン殺害に伴う治安の悪化で、急遽、目的地をアンナプルナ周遊に変更したそうです。

大震災の影響で日本人の観光客が全体的に減少したのか、エベレスト山域に比較すると知名度が低いのか、日本人トレッカーとは2人連れの1パーティーに出会っただけでした。それに比べて、若い欧米人のトレッカーが大勢（中にはポーター無し、大きな荷物を担いで）歩いているそうです。

岡田さんによれば、今回は温泉に浸かる事が出来たし、高価な冬用シュラフを持って行っただけあって、快適な旅だったそうです。温泉（水温は45℃位で、本物のかけ流し）には、集金人もいて、入湯料は50円ほど、裸は厳禁、混浴で上がり湯・マッサージまであるそうです。ヒマラヤの温泉の熱源は何か、火山活動でもあるのか？ との話に、結論は出ませんでした。何方かご存知でしょうか？

▽第3回富士山学講座。今回は「富士山に登った歴史上の人たち」に関して。

伝説によれば、598年に聖徳太子が甲斐の黒駒と雲に乗って登頂した。また、これも伝説によれば、699年に役行者が幽閉の地、伊豆大島から夜ごと海を渡って富士山で修行した、とある。深田久弥氏の「日本百名山」には、外国の山岳史家の書いた世界登頂年代記に633年役行者が登頂した、とある。

11世紀後半に書かれた「本朝文粹」の「富士山記」には、文筆家の都良香による富士山頂の正確な記述があり、例えば富士宮口側の火口にある「虎岩」の描写などは、実際に登った人でなければ書けないような描写がある。

1100年代には、富士修験道の開祖と言われる末代上人が村山口から数百回登頂し、頂上に大日寺を建立した。登山口の村山は富士修験道の聖地となった。江戸時代に入ると、今川藩に庇護されていた村山修験は衰退し、代わって吉田口の発展が顕著になり、富士吉田に御師82人の記録がある。幕府は、庶民の活動を抑えるために度々富士講禁止令を出した。

19世紀に入ると、当時女人禁制であったが、高山辰（女性）が男装して登り、欧米人が登り始めた。1895年には民間人の野中到が気象観測のために冬季初登頂、1930年には気象庁役人の佐藤純一が越冬気象観測を行った。

参考文献としては、「聖徳太子伝歴」「日本霊異記」「本朝文粹」「本朝世紀」「大君の都」（オーロコック）、新田次郎の「富士に死す」「怒る富士」「芙蓉の人」「凍傷」など。

●山行記録

- 佐薙 10/26 丹沢、三の塔→塔
 11/9 丹沢、小丸→塔→政次郎尾根。単
 独トレニング
 三井 なし ハイキングは雨で中止
 遠藤(晶) なし
 竹中 11/13 相原の里山(東京多摩支部
 町田サロン)
 横浜線 相原→六国峠経由 一周(20千
 歩)。町田・八王子市境で八王子側は都市開
 発(自然破壊)が大きく進んでいる。
 本間 10/17→18 箱根・旧東海道 元の
 会社のOB会のハイキング
 10/17 小田原→元箱根(「いせや」泊：
 …この宿お奨めです)
 10/18 元箱根→三島 三島大社にお礼
 参拝・解散
 10/21→23 芦安 登山道整備に参加
 10/21 工事日は朝7時半山岳館集合の
 ため前日芦安入り。塩沢さんに挨拶。その
 後未通ルート(高谷山→カンバ平→檜尾峠
 →トンネル東口)を歩く ランタン泊
 10/22 トンネル西口→夜叉神峠の登山
 道整備に参加 ランタン泊
 10/23 前日と同じ。昼食後「樹木講座」
 「反省会」。その後塩沢さん・清水さんと打
 ち合わせ、帰京。

- 10/31→11/3 奥秩父(金峰→国師→
 甲武信) 単独+藤原仙人
 10/31 仙人の川上村川端下の別荘入り
 11/1 別荘(6:25)→金峰(11:15→12:35)
 →朝日岳(13:35→14:10)
 ここで仙人と別れる。仙人は大弛から林道
 を川端下の別荘に下る。台風の影響で道は
 極めて悪く修復にはかなり時間が掛かりそ
 うとのこと。
 →大弛小屋(15:25) 泊 自炊。台風の影
 響で山梨側の林道も閉鎖のため客が少なく
 4名のみ。
 11/2 大弛小屋(6:20)→北奥千丈岳
 (7:05)→国師岳(8:05)→2224m地点
 (9:10→9:55)→(11)で今朝、川端下から昨
 日下った林道を登ってきた仙人に追いつか
 れる→富士見(11:50→12:00)→(11)で仙
 人と別れる。兔に角脚が速い→水師(12:40
 →12:55)→甲武信岳(13:50→14:00)→甲
 武信小屋(14:30)泊 自炊。宿泊客50→60
 人、テント4張り。大弛とは違い大盛況。
 11/3 甲武信小屋(6:00)→なめ滝(7:50
 →8:00)→毛木平(9:20)→梓山バス停
 (10:35) バスで川端下、仙人別荘へ 反
 省会後帰京。
 *今山行が楽しかったのは、①3日間想定時
 間内で歩けた事。②天気良かった事。星、

- 特に大弛小屋で見た夜空が素晴らしかつ
 た。③行きと帰りのバスに乗り合わせ、泊
 まりも同じだった人とツマミを出し合いな
 がら酒を飲み山の話が出来た事。
 11/9→10 丹沢「尊仏・月見の宴」。「昼
 から会」の会員2名と紙に書いた満月を見
 ながら、焼肉で宴会。大倉尾根堀山の家か
 ら二俣に下る(小草平尾根?)。チョット手
 を入れれば面白いルートになるうが。
 11/17 大柳川溪谷(日本トラベルツ
 アー) 女房と。溪谷そのものは大した所
 ではないが、そこに作った吊橋群には驚い
 た。吊橋が観光になる例のひとつ。
 佐藤(久) 10/24→11/14 ネパール
 アンナプルナ一周トレッキング
 天候にも恵まれ、マナスル・ヒマルチュリ・
 アンナプルナ・ダウラギリ等の眺望を楽し
 んで来ました。
 高崎 11/2 丹沢、大倉尾根→塔→表尾根
 →三の塔→三の塔尾根→大倉
 11/17 丹沢、三の塔尾根→塔→大倉尾
 根(前回の逆コース)。
 また何時かは雪の山を、トレーニング。
 岡田 10/24→11/14 アンナプルナ・
 サークット
 中村(雅) 10/21→22 芦安登山道整備
 10/21 夜叉神峠→高谷山→カンバ平→

夜叉神峠トンネル東口。90周年事業の下調べ

10/22 夜叉神峠西口登山道整備。芦安ファンクラブ主催に参加

10/24～11/14 アンナプルナー一周トレッキング。佐藤(久)さん、岡田さんと3人で。

宮武 10/21～23 芦安登山道整備

●山行計画

三井 11/27 倉岳山 懇親山行

遠藤 11/27 同上

竹中 11/26 東京多摩支部分境嶺第9

回。笹尾根

11/27 倉岳山 懇親山行

11/23 如水会町田支部歩こう会 渋沢

丘陵(渋沢～秦野)

本間 11/27 倉岳山 懇親山行

12/17 倉見山～杓子山 中村(雅)さん、藤原仙人、宮武さんと。

佐藤(久) 11/27 倉岳山 懇親山行

高崎 なし

岡田 なし

中村(雅) 11/27 倉岳山 懇親山行

12/17 倉見山～杓子山～鹿留山。本間さん、藤原さん、宮武さんと4人

■平成23年12月19日■

【出席者】 佐藤、上原、三井、竹中、本間、小島、岡田、中村(雅)、宮武、記録⌘高崎(俊)

▽今回も開会前には、「90周年記念事業」計画の内、針葉樹15号の発行に関する懸案事項、南アルプス旧芦安村にある「芦安ファンクラブ」との登山道整備を中心とした共同事業の展開、一般学生を取り込んだ富士清掃登山の取り組み・時期などの打ち合わせが行われていました。

▽三月会には未だ参加されていませんが、藤原さん(昭和44年卒)が精力的に岩登り・山登りに励んでいます。今年は1000日山に入り、80回十の岩登りをこなされたそうです(三月会にも是非元気な姿を見せて下さい)。

▽夜叉神峠周辺で、登山道整備の下準備の話が進んでいます。今回は、前日参加されたメンバーから、「カンバ平」からのパノラマ写真が披露されました。雲一つ無い快晴のもと、雄大に連なる白根三山、鳳凰・甲斐駒・仙丈等々の山々が綺麗に写っていました。ただし、このような景色を眺めるのは何十年か前になる会員がほとんどで、山の同定には苦勞します。実際に行つて確かめ

る必要がありそうです。

▽カンバ平の南側にはシラビソ人工林が広がっています。そこで樹木の見分け方に話が移りました。白檜會・大白檜會の違いを判別する一つの手段として、下から空が見えるか見えないか、があるそうです。葉が疎で空が見えたら白檜會、密で空は見えないければ大白檜會だそうです。

大亀の木(ムシカリ)、リョウブ(令法、若葉は煮て食用となる)、姫沙羅(サルスベリ、百日紅)、夏椿(沙羅樹)など、三月会に参加される方々には博学の志が多いのです。学生時代に、こういう事を教えてくれた上級生は一人もいなかった、教えてもらっていたら、山歩きの楽しみが幾層倍になつていたことか、との嘆きあり(重荷にあえぎ、汗と涙で樹木も良く見えなかつたなあ)。

▽再び、「オーシヨン会」の謂われについて。その昔、部室等で開いたコンパでは手頃な「オーシヨン・ウイスキー」を飲んだものだ。当時、安いウイスキーとして出回っていた銘柄だった。これを「オーシヨン・ウイスキー」と発音した部員がいたので、これに因んで同期会の名前にした。その後、何人かの「会員」が米国駐在された折に、米国人は「オーシヨン」よりも「オーシヨン」

に近い発音をすることが判ったので、鶴丸高校出身の「オーション协会会员」の溜飲が下がったのだそうです。その後の同期入部の会の名称としては、「ヤロー会」「クロー会」「ハツ会」「トーチン会」「クレージー会」「スイキョウ会」などがあります。

▽第4回富士山学講座。今回は「大沢崩れ」に関して。

静岡県の主催する「富士山ネットワーク」賛助会員の佐藤さんは、この「ネットワーク」の募った「大沢崩れ」見学ツアーに参加されました。この時の実地検分の写真も交えてお話を伺いました。

富士山頂・剣ヶ峰の少し北側が源頭で、「源頭部」「溪谷部」(この区間を「源頭域」と呼ぶ)「中流部」「岩樋部」「扇状地」に区分されている。現在、標高3500m〜3200m付近の両側で活発に土砂の崩壊が見られる。崩壊する土砂の量は、1年間に10トントラックで30万台分に相当する。溪谷部・中流部に溜まった大量の土砂が、雪崩・豪雨によって土石流となり、古くから度重なる災害を生んできた。昭和47年に発生した土石流は下流の潤井川に、河口の田子の浦港まで相当量の土砂を堆積させた。「扇状地」の対策地域には大型テトラポッドなど防護施設が敷設されている。大

沢崩れのメカニズムは、「山頂から標高2200m付近までの延長約2・1kmにわたる源頭部は、柔らかいスコリア層と硬い溶岩層の五層になっており、風雨などによってスコリア層が流出し、自重に耐えられなくなった溶岩層が崩落する」この崩壊が繰り返されている。

●山行記録

佐藤 12/6 Koko Head(オアフ島)。ホノルル・マラソンのためのトレーニング。高度差320mくらい。(筆者注：フル・マラソン初参加で、ホノルルを完走しました) 上原 12/15 陣馬高原下↓陣馬山↓一の尾根↓和田↓藤野駅 三井 12/7 ハイキング 国分寺↓国立↓立川。13・5km 竹中 11/26 笹尾根(東京多摩支部分境 嶺踏査第9回)。日原峠↓横寄山 12/12 鎌倉六国見山(大船↓鎌倉)。如水会町田支部歩こう会に参加(15名) 12/17 倉見山↓杓子山。中村さん他と同じ。意外にタフなコース。富士山はいつでも素晴らしい。 本間 12/7 倉見山↓杓子山。大変な道でした。越後三山以上。 高崎 なし

中村(雅) 12/17 倉見山↓杓子山。本間さん、竹中さん、宮武さん、藤原さんと5人。 12/18 夜叉神峠↓高谷山↓カンバ平往復(シラビソ林も)。本間さん、宮武さんと3人。カンバ平からの大パノラマに満足。 宮武 12/17 倉見山↓杓子山 12/18 夜叉神峠↓高谷山↓シラビソ人 工林。芦安登山道整備のための調査

●山行計画

上原 1/中旬 大垂水峠↓南高尾 三井 なし 竹中 1/10 高尾山シモバシラ観察会 1/14 多摩センター尾根道。東京多摩支部自然保護委の活動に参加 本間 12/27・28 塔ノ岳。「昼から会」山行 高崎 なし 中村(雅) 1/29 秋山二十六夜山↓赤鞍ヶ岳↓厳道峠。本間さん、藤原さん、(宮武さん)と4人

■平成24年1月16日■

【出席者】 佐藤、上原、三井、遠藤、蛭川、竹中、本間、小島、佐藤(久)、岡田、中村

(雅)、金子、松尾(信)、記録Ⅱ高崎(俊)

▽今回も前回と同様、開会前には「90周年記念事業」計画の打ち合わせが行われていました。企画論議も佳境に入っています。「針葉樹15号」の発行、登山道を整備して芦安地区活性化への協力、学生を勧誘して「富士登山」など。

▽久しぶりに、札幌から蛭川さんが参加されました。詳しい近況報告を期待したのですが、「寒い、食い物が美味い」だけに留まりました。「会報に寄稿するからそれまで温めておく」そうです。

今は北国で、グレンデ・山・クロスカン トリーとスキーを楽しんでいるとのこと。半世紀近く前、「やっと滑った5メートル、これが悩みの〜」と言うスキー賛歌がありました。「ヨ、ヨ、ヨッ、ホッホー！」と大声で歌われた姿が思い出されます。妙高・笹ヶ峰でのスキー合宿の時でした。

▽アダージオの松尾さんが「八ヶ岳スーパートレール」の案内書を持って出席されました。今年5月下旬の懇親山行に組み込む予定があります。武田信玄が軍用路として開発したとされる「棒道」をひたすら歩いて、温泉に浸かろう、というコースも一つの候補になっています。

▽また、松尾さんによれば、今年の冬は北からの野鳥がバツタリ来なくなっているそうです。昨秋、木の実は豊作であったにもかかわらず、ハギマシコ・オオマシコが姿を見せてくれない、アダージオの名物だったのに、地震・原発の影響だろうか？ 井の頭公園に飛来する野鳥の種類・数も例年に比較して少ないようです。人間よりも自然の変化に敏感な鳥たちの事ですから、日本は住み難くなったと感じているのかも知れません。

▽「野鳥」の話題では、当然ではありませんが、我が「一橋山岳会ホームページ」にも会員以外の方々のアクセスがあります。今回は中央アルプスで「雷鳥を見た」という三井さんの記事に、上伊那郡の中学校の先生から反応がありました。結論的には、「現在、上伊那郡誌自然編の改訂版執筆のために調査を開始しているが、生息情報とはしないつもり」という意向の様です。宝剣岳・中岳に登山される方は注意して観察してみてください。

▽東京タワーに代わる電波塔(スカイツリー)の高さが634メートルでムサシ(武蔵)に因むようですが、この「ゴロ合わせ」をネタに遠藤さんが日本の山を探られました。日本国内の標高634メートルの山

は？

弥彦山(新潟県西蒲原郡弥彦村)、坂戸山(新潟県南魚沼郡)、天蓋山(新潟県村上市)、岩殿山(山梨県大月市)、矢滝城山(島根県太田市)、飯綱山(長野県上水内群信州新町)、等があります。史実に富んだ錚々たる山々が集まっています。また、信州には「いづな山」が「飯縄山」を含めると五つもあるそうで、「いづな」とは何か？ と問題提起をされました。何方かご存知でしょうか？

●山行記録

佐藤 1/8 棚横手、甲州高尾山。

本間さん、久さんの下見山行に参加。山麓の駅の幾つかの近くには「飲み屋」がないのは困ったことだ。

三井 なし

遠藤 なし

竹中 12/27〜28 丹沢、塔ノ岳〜鍋割山
〜熊木沢出合〜ユースン玄倉林道。昼から
会忘年山行。鍋割から熊木沢が核心

1/14 多摩センター〜鶴川(一部よこや
まの道も)。如水会町田支部歩こう会行事

本間 12/27〜28 竹中さんと同行

1/8 甲州高尾山、棚横手。

3/4 懇親山行の下見

蛭川 所用で状況の折、寄らせてもらいました。今シーズン、クロカン・スキーとゲレンデスキーに各1回行きました。

小島 なし

高崎 なし

金子 12/23～25 鳳凰三山。北義経会、

HUHA C HPへ報告予定

松尾(信) カシガリ山(1620m)。茅野

付近の古東山道をトレースする過程で見つけて登ってみました。反対側はもう霧ヶ峰でした。

●山行計画

三井 2/1 宝登山。一橋同期の友人と

遠藤 なし

竹中 1/22 平地歩き、相模原基線を歩く

2/18 入笠山スノーハイク。JAC東京

多摩支部行事

本間 1/29 二十六夜山。藤原組山行

2/18 奈良倉山。同上

小島 なし

高崎 なし

中村(雅) 1/29 秋山二十六夜山(赤

鞍ヶ岳。藤原、佐藤、宮武、本間、中村の

5人

2/18 奈良倉山。藤原、佐藤、本間、中

村の4人

金子 2/10～12 尾瀬。北義経会

■懇親山行報告■

春の山行 八ヶ岳

日時 2011年5月28・29日

行程 八島湿原(奥霧の小屋)物見石(蝶々

山)深山(車山乗越)白樺湖堰堤(八子ヶ峰)アダージオ

【参加者】 佐藤、仲田、三井、遠藤、本間、三森、中村(雅)、金子、松尾 計9名

▽今回の懇親山行は従来と趣をかえて、八ヶ岳山麓のトレッキング「スーパートレイル200キロ」の一部、八島ヶ原湿原から白樺湖を経て八子ヶ峰に登り、アダージオ着という一見極めて易しそうなコースでしたが、ルートがいくつかあり、通常のただひたすら登って下りるといふ登山と異なり、道標が完備していない箇所をルートを探しながら歩くという面白さがありました。▽少人数だったこともあり、和気あいあいと歩いて、アダージオでは野鳥の話、植物の話、富士山の話、色々な思い出話など夜遅くまで懇親を深めました。

▽第二回のプランもたてられているようで、

楽しみです。皆様方も次回はずいぶん参加ください。

(三井 記)

巻機山(越後シリーズ 第6弾)

日時 2011年9月28～30日

【参加者】 三井、遠藤、竹中、本間、佐藤(久)、岡田、齊藤、中村(雅) 計8名

28日 車3台で現地入り。南魚沼・清水「上田屋」泊

29日 早朝ヘッドランプを点けるかどうかの時間(5:10)に桜坂Pを出発。休憩込みで11時間前後の長丁場を覚悟の山故か、一本調子の登りをいいペースで進む。

五合目(焼松)では眼下に米子沢、遠くに谷川連峰特に大源太山が一際見事、六合目展望台ではヌクビ沢・天狗岩から稜線までのパノラマ、前巻機の手前の竹笹の急登に若干手こずったが、巻機山頂へ(10:10)。270度の景観とSさん持参の「ナシ」を楽しみ、下山にかかる。

下りきった所にある避難小屋で、Eさんが登りで捻挫した足首が痛み出し、Sさんが治療を施し、がっちりテーピングした上で出発。同期のMさんが同行しゆっくり下るが、治療の効果が現れ5～10分の遅れで

追いつく。これを繰り返しながら五合目に着いて、ここまで来ればもう大丈夫と本隊はそのまま下った。

Eさんは既に800m位下っており、足への負担もかなり積み重なり。ペースは落ちたが、17時50分には全員駐車場に集合。今日の宿に向かう。

天気予報の「明日雨」で山行中止と決まり、同館で後日反省せずに済むように、徹底的な反省を行った。五十沢温泉「ゆもと館」泊

30日 各車、名所古跡探訪。帰京。

(本間 記)

秋の山行 倉岳山

日時 11月27日(日)

場所 倉岳山(大月近辺にあり、秀麗富嶽十
二景の9番、990m)

【参加者】 14名 佐藤 鈴木 仲田 三井
遠藤 宮本 本間 佐藤久 中村雅 前神
兵藤 佐藤活 (学生) 小宮山 町田

▽朝9時、準備体操も終え、梁川駅をスタート。沢筋の道をタンタンと歩き、最後の急登で一汗かき、12時前に倉岳山山頂へ。天候に恵まれ「雪の富士」を拝し、恒例のト
ン汁も供され昼食。下山は二手に分かれ、

若手Aチームはお隣の高畑山(981m)經由、老人Bチームは直接下山。途中の「石仏」で合流、一路、反省会場「たかちゃん食堂」へ(午後3時半)。

▽今回は珍しく、31年卒の爺さま(2名)から子供(学生2名)までと幅広く、中に「仕事現役」の働き盛りが3人という人員構成。そのためか、いつもといささか雰囲気違った前向きの反省会でした。なにはともあれ、事無くて上々の山行でした。

■平成24年 懇親山行計画案■

3月4日(日) 甲州高尾山(1091m)、

棚横手(1306m) 佐藤(久) 本間

5月26日(土) 27日(日) 「アダージ

オ」金子 幹事一同

1日目 八ヶ岳トレイル その2「アダー

ジオ」泊

2日目 自由山行

7月27日(金) 29日(日) 越後シリ

ズ第7弾 三井 本間

妙高山(2454m)、火打山(2462m)

7月27日 現地入り 燕温泉泊

7月28日 妙高山 黒沢池ヒュッテ泊

7月29日 火打山 下山

11月25日(日) 大山(1252m)
諸戸尾根ノ雷ノ峰尾根 本間 佐藤(活)

訃報

奥野巖根さんと鹿俣謙一さんがお亡くなりになったとの連絡をいただきました。両氏のご冥福をお祈りいたします。

奥野 巖根(昭和31年卒)

2011年11月13日 逝去

鹿俣 謙一(昭和30年卒)

2011年12月11日 逝去

▽会報123号をお届けします。当初、この会報は若手の針葉樹会員に寄稿してもらって発行しようとして企画しておりました。しかし師走を迎える頃から、誠に残念なことに大先輩の訃報が相次ぎました。石井左右平先輩、鹿俣謙一先輩、奥野巖根先輩の御冥福を心からお祈りいたします。急な事でしたが、石原会員、佐藤会員、蛭川会員のご協力を得て石井先輩の追悼文を今回の会報の中心にさせていただきます。

昨年は5名の会員が他界されました。会員が少なくなり、寂しさはぬぐえませんが、一方で、昨年は吉沢正さん、糟谷知紀さんの針葉樹会入会があり、現役学生部員も2年生の小宮山尚与志さん、町田広樹さんが前神会員らの指導を得ながら山登りに真摯に取り組もうとしています。昨年の蝶ガ岳に続き、この冬は雪の蓼科山に挑戦し、「誰も歩いていない新雪を進み興奮しました」と話しています。新しい力が湧いてくる事を期待して会報発行を続けたいと思いました。(小島)

▽今号は編集幹事がそれぞれ替わり番こに忙しい状態が出来して、発行が一月ほど遅れましたことをお詫びします。

個人的には相変わらず奥多摩(鳩ノ巣)通いをしています。この冬は沢庵漬けと白菜漬けを何樽か漬けたところ、手前味噌ではありませんが旨か

ったです。川名さんにもお裾分けしたので、客観的評価は彼女にお聞きください。春になると、わさび田作業でまた忙しくなります。(井草)

▽スキーに打ち込んだ一、二月でした。一月上旬に八甲田・酸ヶ湯温泉のガイド付きツアーに参加して、パウダースノーを滑る楽しさにはまりました。現地では「白い粉に狂った私」というシールが売られています、やはり白い粉のせいです。思いきつてスキー板を新調し、一月下旬には一人で夜行バスとローカルバスを乗り継ぎ、再び雪降り積もる八甲田ロープウェイ駅に降り立っていました。子どもころから節約こそ美德と教えられてきたため、こんなに遊びにお金を使っていたのだろうか、かなり後ろめたく感じました。そういう思考経路や行動様式を振り切ったのは、自分としては画期的なできごとでした。北海道の小野先輩主宰のニセコ滞在も含め、2カ月のうちに5回、雪を求めて遠出。その間、わずかずつですが、進歩を感じています。板の手入れも真面目にやるようになり、まわりの人の道具の種類や扱い方も気になりました。今まで何をしてきたのだろうと思うほど、気づきがあります。あまりにもスロースターター……わざわざ白状することではないのですが、本気になるって、いいことですね。(川名)